

# アブラツノザメ 日本周辺

North Pacific spiny dogfish *Squalus suckleyi*



## 管理・関係機関

なし

## 生物学的特性

- 最大体長・体重：雄 93 cm・5.9 kg、雌 115 cm・13.0 kg
- 寿命：60 歳以上
- 性成熟年齢（標準値）：雄 9 歳、雌 18 歳
- 繁殖期・繁殖場：2～4 月（出産期、妊娠期間 20～22 か月）、繁殖場は調査中
- 索餌期・索餌場：調査中
- 食性：魚類、頭足類
- 捕食者：東北地方太平洋岸沖のマダラの胃内容物として出現

## 利用・用途

第 2 次世界大戦前後は、ビタミン A や肝油の原料として高い需要があったが、合成ビタミン A の普及によりアブラツノザメ漁業は衰退した。東北地方では刺身や煮物、照り焼き等で食されるほか、ちくわ等の練り製品原料として利用される。近縁種の *Squalus acanthias* とともに世界で最も利用されるサメとしても知られ、ヨーロッパ諸国では水産資源としての評価が高い。また、近年では肝油や軟骨エキス等健康補助食品の原料としても利用されている。

## 漁業の特徴

北日本の太平洋側や日本海側では、少なくとも江戸時代から漁獲されていたが、漁獲対象として注目されるようになったのは明治 30 年代末頃からであり、北海道や青森、秋田、石川県等で当初はマダラ等を対象とした底はえ縄漁船の兼業対象種として漁獲された。その後、昭和初期に機船底びき網で漁獲されるようになった。太平洋戦争後は食糧増産政策に伴い主に機船底びき網により積極的に漁獲され、漁獲量が増加した。現在、本種の主な漁獲は、以前に比べて本種を主対象とした操業が減少した沖底と本種を漁獲対象とする底はえ縄漁業により行われている。

## 漁獲の動向

アブラツノザメを多獲していた 1952～1955 年の平均漁獲量は 42,000 トンに達した。その後、漁獲量は 1950～1960 年代の合成ビタミン A の普及による国際取引の減少とそれに伴う魚種単価の下落により急激に減少した。1990 年以降の我が国周辺におけるアブラツノザメの推定漁獲量は、2,000～4,500 トンで比較的安定して推移している。

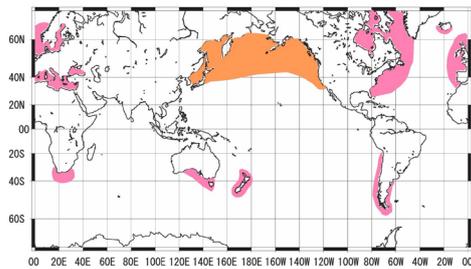
## 資源状態

本種について、複数国が参画する国際的な漁業管理機関による資源評価は実施されていないものの、北太平洋東部では米国やカナダが資源評価を実施しており、それぞれの評価海域において比較的豊度が高く、近年は乱獲状態にないと判断されている。我が国周辺海域に生息するアブラツノザメについては、1972 年以降の沖底漁獲成績報告書から集計した太平洋北区のかけまわしの単位努力量当たりの漁獲量（CPUE）と、津軽海峡における 1986 年以降の三尻及び大間の底はえ縄の CPUE に対して一般化線形モデルによる標準化を行い、季節や海域等の影響を考慮した標準化 CPUE を用いて、資源の水準と動向を判断した。1 が平均値となるように標準化した際の 2022 年における標準化 CPUE の値は、かけまわしでは 0.54、底はえ縄では 0.63 となった。かけまわしと底はえ縄の標準化 CPUE それぞれにおいて、最大値から 0 の間で 3 等分し、上から高位、中位、低位とした場合、かけまわしと底はえ縄ともに直近年の標準化 CPUE の値は中位水準にあることから、日本周辺におけるアブラツノザメの資源状態は現在中位水準にあると判断される。また、かけまわしと底はえ縄の標準化 CPUE の直近 5 年間の傾向から、資源動向は減少傾向と判断されるが、本資源は長期的に変動を繰り返すことから動向の判断が難しく、引き続き注視していく必要がある。

管理方策	
津軽海峡で操業を行う底はえ縄漁業者により小型魚の再放流及び漁獲量上限の設定等、資源保全に向けた自主的な取り組みが行われているが、公的な管理方策は実施されていない。なお、2007 年のワシントン条約第 14 回締約国会議及び 2010 年の第 15 回締約国会議では、附属書 II への掲載が EU から提案されたが採択されず、その後掲載提案は行われていない。2011 年には、カナダのブリティッシュコロンビアにて操業を行うアブラツノザメ漁業が、サメを対象とする漁業としては世界で初めて Marine Stewardship Council (MSC) 認証を取得している。	

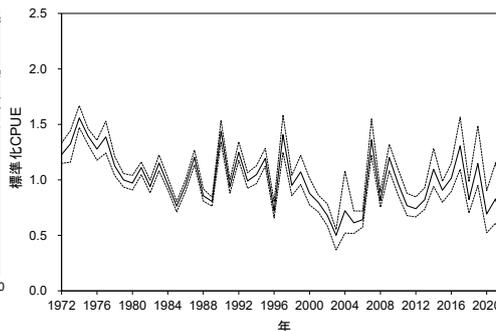
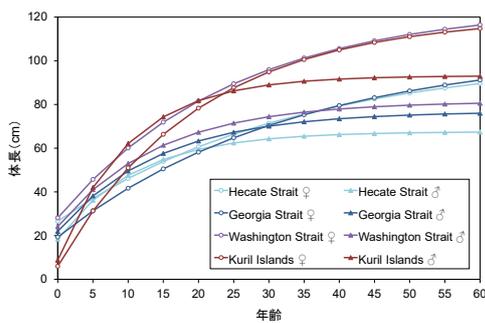
アブラツノザメ（日本周辺）の資源の現況（要約表）	
世界の漁獲量 (最近 5 年間)	調査中
我が国の漁獲量 (最近 5 年間)	2,084~2,844 トン 最近 (2022) 年: 2,152 トン 平均: 2,319 トン (2018~2022 年)
資源評価の方法	かけまわし及び底はえ縄の標準化 CPUE により水準と動向を評価
資源の状態 (資源評価結果)	1 が平均値となるように基準化した際の標準化 CPUE の値は、かけまわしでは 0.54、底はえ縄では 0.63 標準化 CPUE を過去の最大値から 0 の間で 3 等分し、上から高位、中位、低位とした場合、いずれの漁法でも資源の水準は中位、動向は減少
管理目標	検討中
管理措置	検討中
管理機関・関係機関	なし
最新の資源評価年	2022 年 (漁獲量・CPUE モニタリング)
次回の資源評価年	未定

\* 2022 年の漁獲量は暫定値を用いて推定



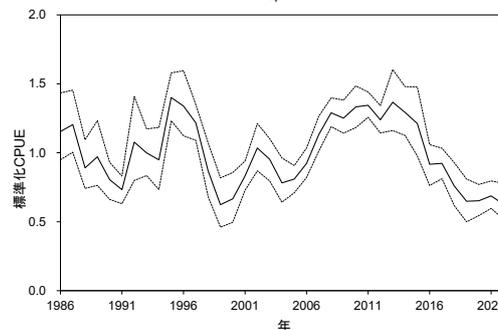
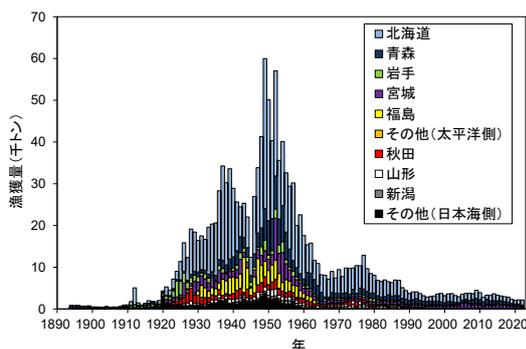
アブラツノザメ類の分布

オレンジ色: *Squalus suckleyi*, ピンク色: *S. acanthias*



太平洋北区における沖底（かけまわし漁法）の標準化 CPUE (1972~2022 年) 標準化 CPUE は 1 が平均値となるように基準化、破線はブートストラップ法で推定した 95%信頼区間の上限値と下限値。

アブラツノザメの雌雄別海域別成長曲線



津軽海峡内で操業を行う底はえ縄の標準化 CPUE (1986~2022 年) 1986~2012 年の三厩及び 2007~2022 年の大間の漁獲データを用いた。標準化 CPUE は 1 が平均値となるように基準化、破線はブートストラップ法で推定した 95%信頼区間の上限値と下限値。

サメ類漁獲量から推定したアブラツノザメの漁獲量 (1894~2022 年)